

〔コメント〕中世政治史における紛争解決とシンボリックなコミュニケーション ゲルト・アルトホーフの研究に関するコメント

著者	服部 良久
雑誌名	公家と武家 その比較文明史的研究
巻	22
ページ	86-92
発行年	2004-01-30
その他のタイトル	Comment
URL	http://doi.org/10.15055/00002812

【コメント】

中世政治史における紛争解決と シンボリックなコミュニケーション ーゲルト・アルトホーフの研究に関するコメントー

服部 良久

京都大学

1. アルトホーフの中世史研究：全般的特色

1980年代までアルトホーフは、祈禱兄弟盟約簿やネクロロギウムを用いて、人的結合の視点からオットーネン時代の政治史を考察してきたが、90年代以後、アルトホーフは、より広くコミュニケーションの視点から、中世政治史の特色を明らかにしようとしている。そのためにアルトホーフは、法や証書などからは十分に読みとれない中世貴族、国王のインフォーマルな行為を、主として年代記など叙述史料に基づいて考察するのだが、このような中世政治史へのアプローチは、次のような認識を前提にしている。

まず10世紀から12、13世紀までのドイツ（神聖ローマ帝国）をアルトホーフは、人的結合国家として、つまり制度的な領域国家ではなく、パーソナルな結合に依存した国家と考える。そしてそこでは縦の封建関係よりも、親族関係や友好関係などの、法や制度に規定されない、多様な人間の結合が重要な意味をもっていたことを強調するのである。

また中世社会では一般に法秩序が弱く、後で述べるフェーデのような暴力に満ちており、そのために野蛮な社会のイメージをもって理解されがちであるが、こうした中世社会においても、社会秩序のための独特の行動ルール（これをアルトホーフはSpielregeln, rule of the gameと表現する）が存在した。この不文のルールは絶対的なものではないとはいえ、中世人の行動を強く拘束した。このようなルールに沿った行動においては、言葉以上に、シンボリックな儀礼的行為が重要な役割を果たしたとアルトホーフは考えている。

こうした儀礼的コミュニケーションの意味がとくに明確に現れるのは、紛争とその仲裁・降伏・和解など、紛争に関わる行為においてであった。アルトホーフの予定されていた報告も歴史記述を手がかりとして、中世盛期における戦士貴族の紛争とその解決のルールないし、不文の慣習を明らかにしようとするものであった。

以下では、報告予定原稿の内容をもふまえて、主として貴族社会における紛争ルールに関するアルトホーフの研究を紹介し、若干のコメントを加えたい。

2. 政治的コミュニケーションにおける儀礼的、象徴的行為

まずアルトホーフが指摘する、中世貴族の政治的意思形成や紛争と紛争解決において頻繁に現れる、いくつかのコミュニケーション行為を挙げておこう。

国王や貴族の間の政治的合意形成のためには、まず個別的に（例えば国王と個々の有力貴族、諸侯の間で）内密の協議*colloquium familiare*が行われ、ほぼ合意が成立した後に、全体の集会で確認のためのオープンな見解表明*colloquium publicum*がおこなわれた。典型的には国王選挙において、このような合意形成のプロセスが確認されるのだが、紛争解決のための仲裁人による交渉も同様であった。敵対貴族が国王と和解する場合、まず仲裁者の活動を通じて、和解の条件について双方の合意が成立した後、おおやけの場で、一種の演出された行為として、降伏の儀礼*deditio*が行われた。衆人環視の中で、国王の足下に伏して謝罪する行為*deditio*を行った者に対して、国王は慈悲と寛容を示すのが、いわば不文のルールであると認識され、この行為を行うことが出来た者には、通例国王の恩顧と元の地位回復が保証されたのである。こうした儀礼的な降伏と和解の行為は、12世紀後半、神聖ローマ皇帝フリードリヒ・バルバロッサのイタリア遠征において頻出する。その際、降伏するイタリア都市（コムーネ）の住民は懺悔服に裸足で、抜き身の剣を首に当て、鞭をもち、聖職者は十字架を担いでバルバロッサの前に出頭した。そこには明らかに、宗教的な贖罪行為との類似性がみとめられる。こうした公の場での儀礼的行為により、双方が合意した和解条件の遵守を義務づけられたのだともいえる。

*deditio*は降伏・和解以外にも様々なシチュエーションにおいて用いられ、場合によっては国王自身もこれを敢えておこなった。11世紀前半の国王コンラート2世は、敵対貴族を断罪するために息子ハインリヒの協力を要請し、これを拒否したハインリヒの足下に伏して涙と共に哀訴したと伝えられる。国王ハインリヒ4世が教皇グレゴリウス7世に対してカノッサで行った*deditio*はよく知られた事実である。

アルトホーフによれば、制度化されたコミュニケーション手段が未発達な中世社会においては、シンボリックなデモンストレーションの行為は、誤解のない、明確な意思形成や意思表示の手段であった。年代記などの叙述史料には、国王や貴族が公的な場で落泪したり、過度の怒りを示すなどの記述がよくみられる。ホイジンガやエリアスは、中世の人間は感情をコントロールできず、無統制な感情が政治をも左右したと述べている。しかし、そうした感情表出もまた明確な意思表示のための象徴的な行為であり、政治的コミュニケーションの手段であった。アルトホーフによれば、このようなシンボリックな言葉と行為によるコミュニケーションは全体として、フェーデや紛争の拡大を抑制し、平和の回復・維持に大きく貢献していたのである。

3. 政治史における紛争と紛争解決

今回のシンポジウムのテーマに即していえば、典型的な戦士型社会であるヨーロッパ中世、とくに10~12、13世紀は、国家的な制度や法秩序が弱く、貴族領主たちはしばしば武力行使によって自分の財産、権限、そして名誉を維持し、拡大しようとした。ドイツ史ではフェーデと呼ばれるこうした実力行使（自力救済）は、しばしば流血をとまなう、当事者間の報復の連鎖を生み出し、「野蛮なヨーロッパ中世社会」のイメージをつくり出すことになる。

しかし同時に中世には、暴力を回避し、その拡大を抑制するためのルール（慣行）も存在した。先に述べたコミュニケーション行為の重要性をふまえて、中世の人々にとって最も重要な問題であった紛争と紛争解決の不文のルールを明らかにしたことは、アルトホーフの政治史研

究への大きな貢献であるといえよう。一般に戦士貴族の生得的権利（身分的特権）と考えられていたフェーデは、国王や諸侯の治安法令であるラント平和令Landfriedeと、公的な裁判制度の発展によって、徐々に克服されていくと考えられている。しかし実際にはフェーデは慣習として近世まで存続し、その克服は国家権力にとっても容易なことではなかった。有力貴族、諸侯は不利が予想される国王裁判をはしばしば忌避し、また裁判を支える公的な強制権力が不十分である故に、判決執行は当事者に委ねられた。そもそも裁きを受けること自体、誇り高き戦士貴族の名誉意識とは相容れないものであったといえよう。

しかし他方で封建貴族のフェーデは通例、平和的な手段による解決の可能性を前提とし、有利なかたちの決着に至ることをめざして行われたのであり、決して破滅的な戦いへと向かうものではなかった。したがって、こうした貴族の紛争においてはむしろ裁判以外の、仲裁・和解などインフォーマルな形で解決がより有効であり、とりわけ諸侯や有力貴族のかかわる紛争の解決は、このやり方が一般的であったと思われる。たしかに裁判は行われたが、それは近代の裁判のような自立した組織をもつ法的制度ではなく、実際には裁判と裁判外の仲裁は、容易に相互に移行する、流動的な関係にあった。

ではこのような貴族社会における紛争解決の実態は、中世ドイツにおいては時代的にどのように推移しているのだろうか。

(1) カロリング時代～11世紀

カロリング時代の国王は貴族の紛争に対して、これを超越した存在として、裁判を行った。とくに王権を損なう反乱などの大罪は、死刑、盲目化、修道院送りなどに処され、すくなくとも恩赦による元の地位の回復はあり得なかった。しかし10世紀以後、貴族、諸侯の選出と支持によって即位するドイツの国王（ないし皇帝）は、貴族との協力関係を必要とし、貴族とともに友好・同盟関係amicitiaを形成した。したがって国王と貴族は、いわばおなじ結合と紛争のルールの中にあり、国王は貴族の紛争に対して仲裁による和解を優先し、かつ国王も貴族との紛争において仲裁を受けたのである。

仲裁においては親族関係、友好関係とともに、紛争当事者のプレステイジdignitasが考慮された。国王が敵対貴族に対しても概して寛容な措置をとったことは、オットーネン時代における反乱の事例が示すとおりである。国王の反乱貴族・諸侯に対する武力行使は、城塞の部分的破壊など限定されたものであった。これと並行して仲裁者による、とりなしと和解への道が準備され、服従と和解、恩寵回復の儀礼によって、こうした敵対貴族にも、しばしば元の地位・レーエンが回復されたのである。

法制史家ハインリヒ・ミッタイスは11世紀以後、国王と貴族の紛争は裁判で解決されるようになってと述べた。たしかにザリア王権のもとでは仲裁と和解よりも、裁判権の行使を重視する傾向はみられる。しかし国王宮廷裁判において集団で判決を導くべき諸侯が、同輩諸侯に対する判決を拒否する場合もあり、アルトホーフは、全体として10、11世紀には、仲裁と和解の慣習が連続していたと考えている。

このような紛争解決の慣習の背景となる国王と有力貴族の権力関係については、詳しく論じ

る余裕はないが、アルトホーフは、カロリング末から10世紀初の危機を通じて貴族社会の中に共同体（ゲノッセンシャフト）関係や友好関係が浸透し、国王と貴族が接近したこと、他方で封、官職の世襲により、貴族社会の階層秩序が固定化しはじめ、これに対する王権の介入が困難になったことなどを指摘する。なおヘルマン・カンブの、中世初期と盛期における仲裁活動に関する詳細な研究によれば、諸侯の政治的成長と彼らの帝国に対する責任意識にもとづき、むしろ11世紀に、聖俗の諸侯による仲裁活動がより明確なかたちをとるのである。

(2) 12世紀：シュタウフェン朝時代

法制史研究者は一般に、12世紀のシュタウフェン朝時代には、国王裁判の機能が強化され、また活用されたと考えているように思われる。しかしアルトホーフは、この時代においても、国王と諸侯の、そして諸侯間の紛争が、裁判と判決を極力避け、忍耐強い仲裁活動によって克服されたことを明らかにしている。本日予定された報告では、シュタウフェン朝時代の最も有力な諸侯であり、またシュタウフェン家に対抗する勢力であったヴェルフ家の家系記述（一種の家年代記、*Historia Welforum*）を史料として用い、ヴェルフ家をめぐる紛争の過程で現れる紛争収拾、仲裁活動を事例として、紛争のルールを考察している。以下ではそうした事例をいくつか紹介する。

シュタウフェン朝初代の国王コンラート3世は1138年の即位早々に、王位承認を拒否するヴェルフ家のハインリヒ倨傲公と争わねばならなかった。王権のシンボル *insignia* を引き渡そうとしないハインリヒに対し、国王コンラートは、判決による断罪ではなく、仲裁者 *mediatores* をたてて、宮廷集会への出頭と和解交渉を促す。これは伝統的な紛争解決の手順であるが、ハインリヒは三度におよぶ召喚にも応じなかった。そこで宮廷集会における諸侯の判決は、ハインリヒに平和喪失＝アハトの罰を宣告する。しかしこの判決も、ザクセンを拠点とするハインリヒの強力な支配基盤を揺るがすことはできなかった。国王はザクセンへの遠征を試みるのだが、逆に司教たちは戦闘を妨げ、仲裁をおこなおうとしたので、国王は休戦を余儀なくされたのである。この場合、いったん下された判決によるアハトの宣告も、和解交渉の継続を妨げなかったといえる。この後ハインリヒの急死により、コンラートの相手は、ハインリヒの兄弟、ヴェルフ6世に移る。

なお帝国直属の高位聖職者にして諸侯でもある司教たちは、10世紀以来、ドイツにおける紛争の仲裁者として重要な役割を果たしてきた。しばしば司教の列聖を意図して記されたその伝記（司教伝 *vita episcoporum*）では、そうした平和のための活動は聖人的司教に相応しい行為として賞賛されている。

さてヴェルフ6世は、バイエルン大公領を要求して、国王コンラート3世とフェーデをおこなうのだが、このときには両者の甥にあたる、後に国王となるフリードリヒが仲裁し、和解を実現している。従来、裁判が重要な役割を果たしたとされてきた、コンラート3世とハインリヒ獅子公の争いにおいても、コンラートは繰り返し宮廷集会に獅子公を召喚し、出頭しない獅子公に対して欠席裁判をおこなうことなく、ザクセンに対する小規模な軍事行動を行うにとどまっている。

このようにアルトホーフによれば、叙述史料を子細に検討すれば、12世紀の国王と有力諸侯の紛争のプロセスにおいても、和解を目指して行われる仲裁と交渉が、裁判以上に重要な意味をもっていたことが、明らかになるというのである。

同様にヴェルフエン家の家年代記に現れる、ハインリヒ倨傲公とレーゲンスブルク司教のフェーデにおいて、双方はイーザー河を挟んで陣を整えた。そこでヴィッテルスバハ家の宮中伯オットーが、仲裁者として重要な役割を果たすことになる。双方に結びつきを持つ知恵者オットーは、両軍を観察した上で、ハインリヒの軍勢力が上回っているとの情報を司教側に流し、戦闘開始を躊躇させた。さらに司教軍に加わっている、自分の親族でもあるフリードリヒに状況を説明し、降伏を勧める。フリードリヒはこれに応じて、ハインリヒ倨傲公の陣営を訪れ、その足下に伏して恭順を誓い、ハインリヒの側に受け入れられた。これは先に述べた、事前交渉に基づく降伏の儀礼*deditio*である。宮中伯オットーはさらに、自分の義理の息子でもあるオットーをも説得し、オットーはこの勧告を容れて、自分の城塞と我が身をハインリヒの手に委ねた。オットーはハインリヒにより、バイエルンからの追放を宣言され、ハインリヒの家臣の下に拘禁されるが、まもなく赦されて下の地位を回復される。このような宮中伯オットーの仲裁活動により、レーゲンスブルク司教とヴェルフエン家のハインリヒ倨傲公の間の武力衝突は回避され、まもなく両者の紛争の原因となった問題も解決されて、和解が成立したのである。

この事例において重要なのは、仲裁人の役割と、和解成立のための、何らかの賠償行為をもたう降伏儀礼*deditio*である。*Deditio*は先にもふれたが、これをおこなう者に、紛争相手の被害状況によっては、かなり厳しい償いを強いた。同じくヴェルフエン家の年代記に記された、ヴェルフ6世とテュービンゲン宮中伯のフェーデは、皇帝フリードリヒ・バルバロッサの仲裁により決着をみた。宮中伯は懺悔の火曜日にウルムの集会において、皇帝やヴェルフエン家の面々の前で鎖を体に巻き、身を伏して謝罪したが、なおその後一年半の拘禁に堪えねばならなかったのである。

さて、仲裁人に話を移すなら、適当な仲裁人を得られぬ場合、紛争は長引き、政治秩序の危機をもたらすことになる。叙任権闘争時代のドイツがその例である。先に述べたように、効果的な仲裁を期待され、またなしえたのは、国王自身を別にすれば、第一に司教など高位聖職者であった。ドイツの司教は国王との密接な結びつきと、その高位聖職者としての信望と権威において、一般に仲裁人として適任であると見なされた。さらに11世紀末以後は、王国の政治的担い手として成長しつつある世俗諸侯も、仲裁者の役割りを果たし、12世紀には先の事例の宮中伯オットーのように、シュタウフェン朝と密接な関係にあるヴィッテルスバハ家や、バーベンベルク家、そしてヴェルフエン家自身も、様々な紛争の仲裁役を務めている。

仲裁人は紛争当事者間のコミュニケーションを維持するため、双方からの信頼を不可欠とし、またそれなりの権威をも必要とした。しかし仲裁者としての権威は、自身の強制力よりも、むしろ社会による仲裁の必要ないし受容に由来するものであった。紛争当事者を含めた社会による仲裁の選択、仲裁人とその仲裁の受容は、結局はこうした戦士型社会における、秩序維持のための慣行ないしルールであったといえる。もちろんそれは絶対的な強制力を持つ規範ではないが、当事者がこれを拒否するなら、かなりの不利益を被ることを覚悟しなければならなかった。

たのである。

仲裁ないし調停活動は、今日の世界における民族紛争や国際紛争において決定的な重要性をもっているが、アルトホーフは、紛争収拾に不可欠の存在であった仲裁人の活動は、異文化間比較に適したテーマであると述べている。この点には最後にもう一度ふれることにしたい。

(3) 13世紀における紛争解決

このように12世紀の紛争プロセスにおいても、様々な段階でその拡大を抑止し、また和解に至らせるための、インフォーマルな活動が行われていた。裁判は仲裁・和解と明確に区別される行為ではなく、裁判への召喚は当事者を和解交渉に応じさせるための手段でもあった。このような紛争に関するルールは、決して12世紀でついでるものではなく、制度化の傾向を示しながらも存続していく。

最後にアルトホーフが取り上げた、13世紀の国王ルードルフ・フォン・ハプスブルクとベーメン（ボヘミア）王オットカールの紛争を紹介する。1274年、ルードルフは、忠誠誓約を拒否してオーストリアを占拠したオットカールを、宮廷裁判において告発する。諸侯から判決案の提示を求められたライン宮中伯は、オットカールの帝国レーエン（封土fief）の没収を判決とする。そこで国王はオットカールを召喚したが、オットカールは不出頭を続けたので、二度にわたってアハトと破門が宣告された。これをうけて1276年、ルードルフはオーストリアに遠征する。しかしヴィーンでは戦闘の直前まで、双方の側を代表する4人の諸侯が仲裁の交渉をかさね、和解が成立した。この仲裁人団には、先に判決を提示したライン宮中伯も加わっていた。最終的にはオットカールの契約不履行により決裂し、戦いにおいてオットカールは敗死する。

この事例についてアルトホーフは次の点を指摘している。紛争当事者の一方が国王であることはあまり意味を持たなかった。諸侯には、国王に対する反逆者に公的処罰を下すという意識はなく、いわば私的な紛争のごとく仲裁につとめた。したがってアハトや破門という判決や措置も、和解交渉の妨げとはならず、和解が成立すれば判決は取り消されたのである。しかし双方の合意によって構成された仲裁者団の裁定に違反することは、裁判の拒否以上に、重大な行為と見なされた。かくしてアルトホーフによれば、仲裁による紛争解決の慣行は、一層その輪郭とルールを整えつつ、13世紀にも存続していった。インフォーマルな仲裁活動は中世後期には、より制度化された仲裁裁判Schiedsgerichtへと発展していくのだが、なおこうした制度と併用されつつ、その存在意義を持ち続けたのである。

4. 意義と問題点

以上に紹介したアルトホーフの研究は、主として叙述史料にもとづき、法や制度の外にある、インフォーマルなコミュニケーション行為から、政治史を読み解き、このような行為やそれをコントロールする規範・慣習を含めて、中世独自の政治秩序を考えようとする点に、その特色があるといえよう。紛争の歴史人類学的な研究や、中世における儀礼とシンボルに関する研究は、すでに欧米でかなりの蓄積があが、それらは主としてローカル・コミュニティ内の紛争や、

国王儀礼に関するものであった。これに対し、広く国王をふくめた貴族社会の紛争や、コミュニケーション形成の様々な儀礼的行為を対象としていることに、アルトホーフの研究の意義がみとめられるのである。

つぎにアルトホーフの紛争研究の問題点を指摘しておこう。アルトホーフの関心は、紛争解決のプロセスに集中している。そのため、暴力、とくにフェーデ自体が、政治的意思表示の手段であり、コミュニケーションの手段であるという認識が不十分であり、したがって紛争主体の意識や行動に対する考察も十分ではない。

またアルトホーフは、紛争解決における仲裁と和解の優先を、プリミティヴな社会に広く見られる慣習であり、ヨーロッパでは少なくとも12、13世紀ごろまで一般的であったと考えている。しかしアルトホーフの研究が、ドイツの史料のみを典拠としていることは明らかである。イギリスのドイツ中世史研究者ティモシー・ロイターは、やはり国王フリードリヒ・バルバロッサが裁判ではなく、仲裁を優先したことに注目している。そして当時のドイツ国王に期待されたのは、判決ではなく仲裁であり、フェーデの排除ではなく、利害の調整であったと述べる。ロイターはそのうえで、このような王権のあり方は、ドイツの特有の道Sonderwegではないか、と問いかける。アルトホーフがドイツの事実在即して説くところは、同時代のヨーロッパにおける貴族社会の紛争解決のあり方に照らせば、どのように特徴づけられるのだろうか。

マルク・ブロックは、人がいかに裁かれるかに、その社会のシステムが最もよく示されると述べた。ドイツ特有の道であるか否かは別にしても、紛争と紛争解決の比較史研究は、様々な地域と時代における統治者の権力や権威の性格、社会を構成する人々の相互関係から宗教文化に至るまで、広いパースペクティヴにおける比較につながる可能性をもっているといえよう。

さらに私自身の関心を付記するなら、紛争調停・和解という貴族、諸侯、国王の間のコミュニケーション行為が、同時代の政治秩序、国家統合において持つ意味を考えることである。とりわけ12、13世紀には王権から自立的に展開する、各地域における諸侯の紛争仲裁のネットワークと、国王宮廷における裁判や仲裁の相互関係を明らかにすること、それによって紛争解決を軸として、中世盛期の政治秩序を再検討することを課題としているのだが、これはアルトホーフの関心とはいささか異なるものであるかもしれない。